

「歴史学から見た日本の閉鎖性」

ブルース・L・バートン

2004.5.31 放送

今回のテーマは、歴史学から見た日本社会の閉鎖性です。日本語には「島国根性」という表現がありますが、国語辞典によれば、「島国に住む住民にありがちな、視野が狭く閉鎖的で、こせこせ性質」のことだそうです。「こせこせした性質」とは少し言い過ぎだと思いますが、閉鎖性自体は、島国日本の特徴の一つであり、日本の今後を論じる場合、避けては通れない問題だと思います。

私は日本史が専門で、この20数年、日本と外国との歴史的関係、つまり日本の対外交渉史を研究して参りました。そのあいだに、この分野における研究動向ががらっと変わって、まったく新しい日本史像が描かれるようになっていきます。

20年前ならば、日本が19世紀半ばに開国するまでは孤立した島国で、独自の歴史を歩んできたと一般的に言われていました。いわゆる鎖国の時代はもちろんのこと、それ以前の日本も、中国などからさまざまな文化や制度を学んだとはいえ、海外との日常的な交流はごく少なく、日本社会が一つのクローズドシステム、つまりは閉鎖系として機能したと考えられていたのです。

ところが今では、こうした「島国論」と呼ばれる考え方は否定されており、日本はどの時代においても海外との間に活発な交流があり、日本社会が基本的にオープン、つまり開かれたものであったと論じる学者が多くなりました。鎖国と言われる江戸時代ですら、アジア諸国とのあいだに継続的な交流があり、日本が決して閉ざされた状態ではなかったとの見方が、いまや歴史学者の間では常識となりつつあります。

なぜ、これほどまでに研究動向が変わったのでしょうか？それは、新しい史料や事実が発見されたこともありますが、むしろ私は、日本史研究者たち自身の姿勢や価値観が変わったからだと思います。第二次大戦後の歴史家たちは、この戦争で日本が果たしたあまりにも否定的な役割のために内向的となり、しばらくは日本の対外関係史に対して背を向けていました。しかし、1980年代に入ると、「もはや戦後は終わった」とか、「国際化」といった言葉が叫ばれるようになり、学者たちはそれに対応するかのように対外関係史に関心を向け始め、現在では、一所懸命にグローバル化のルーツを日本の歴史の中に見いだそうとしている、このように理解できると私は思います。これは、学者の考え方がいかに時代の流れに左右されやすいかを示す、とても良い例だと言えましょう。

それでは、本当に最近の研究者たちが主張するように、日本は常に外に対して開かれた社会だったのでしょうか。確かに、歴史をさかのぼってみれば、日本社会がかなりオープ

ンで外との交流が盛んだった時代もあります。その最も顕著な例は、戦国時代、つまり 15 世紀後半から 16 世紀までの百年間です。この時期には、いわゆる中央政府と言えるものがほとんど機能せず、そのために日本が文字通りボーダーレスな社会となり、日本人も外国人も自由に国境を越えた交流を行うことができました。

しかし、実はこれは例外であって、他の多くの時代は、島国という地理的条件に加えて政府による規制も働いており、結果として海外諸国との間の交通量は微々たるものに過ぎませんでした。一例ではありますが、たとえば平安時代に日中貿易が盛んで中国からの船がたくさん博多湾を訪れていたと言われますが、実際その数を調べてみると、年にせいぜい一、二艘程度で鎖国時代よりも交通量が少なかったのです。したがって総合的に見て、日本は歴史的に孤立した島国であったという昔の常識はそれほど間違っていなかった、というのが私の考えです。

では現代の日本はどうでしょうか。現代におけるグローバル化のまっただ中で、孤立した島国日本は、実際の生活においては、完全に過去のものとなっています。去年だけでも約一千 600 万人の日本人が海外へ出かけ、500 万人の外国人が日本を訪れました。また衛星放送やインターネットを通じて我々は瞬時に海外の出来事や情勢を知ることができ、地球は昔では考えられなかったほど狭いものとなっています。

しかし国境の壁がなくなったからと言って日本人の心の壁がなくなったわけではないようです。むしろグローバル化が進めば進むほど、閉鎖的な考え方がその姿を現すという不思議なところがあります。そうした島国根性は、特に政治家や、国家公務員、オピニオンリーダーといった権力者がかかりやすいようです。国や社会を守る責任から来る一種の職業病とでも言えるのでしょうか。いずれにしても、この人たちは今、古き良き時代の日本のイメージを掲げて排他的な愛国主義に走ろうとしていると私は思います。若干の例を挙げて説明しましょう。

皆さんの記憶に新しいと思いますが、数年前に、今までの日本史教育が自虐的な内容からなるとして、子供たちにもっと明るい歴史像を教えるべきだという議論がありましたね。そうした考え方に基づいた教科書がその後出版され、一部の学校で実際使われています。また、日本の文部科学省は昨年、学校教育のなかに、国を愛する心、つまり愛国心の育成を盛り込むべきだという考え方を示し、これも実現されてしまいました。

さらには、政治家たちの保守的発言も依然として気になります。ここ数年、毎年のことですが、憲法記念日の前後になると、日本の国会で憲法改正論がかなりの盛り上がりを見せています。改正論の中身としては、現行の憲法の柱である民主主義のような普遍的な概念も結構だが、もっと日本の伝統に因んだ、日本人の「体臭」、日本人の「DNA」を反映した憲法にすべきだという議論が多かったように思います。そのような議論の裏には、神の

国、皇室、君が代、武士道、米作り、といったイメージで日本を規定するとともに、いわゆる純粋な「日本人」だけがそこに含まれるべきだという認識があると感じるのは、私だけでしょうか。

今申し上げた一連の動きは何が原因かいうと、グローバル化に対する反動ということに尽きると私は思います。時代が変われば変わるほど、人々は不安を感じ、精神的なよりどころ、つまりはアイデンティティーを必要とします。それはごく自然なことで、世界中のどの国においても見られる現象です。しかし特にこの日本では、そうしたアイデンティティーを求める動きが、不健全な排他主義に走る傾向があるようです。DNA が少し違うからといって、日本国憲法の恩恵に預かってはいけないと言うのでしょうか。こんな質問を政治家たちに問いかけたくなってしまう。

しかし排他的なのは政治家の発言だけではありません。ここ数年、日本のメディアは外国人による犯罪を過剰に報道し、外国人一般のイメージを悪く描いています。治安を守る必要はもちろんありますが、外国人のみをターゲットにすることは、人権の侵害でもあります。

また、こうした動きに共鳴して入国管理事務所も、昨年からは外国人入国希望者に対してかつてないほど強硬で排他的な姿勢を示しています。入国審査の強化は、日本の良き理解者となってくれるはずの留学生の減少にもつながりかねず、あまり日本のためになるとは思えません。

グローバル化の時代だからこそ、よりグローバルな姿勢が必要。今こそ、過去と決別して日本特有の島国根性を捨てて新しい時代を迎えるべきではないでしょうか？

それでは。